

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

ひとつに 力を合わせて、乗り越える



茨城県の南東部に位置する霞ヶ浦は、日本第2位の湖面積をもつ淡水湖。洪水や塩害からくらしを守り、増大する水需要のために昭和46年に計画された霞ヶ浦開発事業により、湖岸堤工事、水門改築工事、流入河川工事、補償工事などが行われ、平成8年に完成した。

平成23年に発生した東日本大震災では震度6の強震に見舞われ、管理区域では堤防の沈下・亀裂、堤防護岸の損傷などが発生。今回は、震災発生時から震災関係工事が完了する平成25年3月までの約2年間、用地保全課として、住民と機構の橋渡し役を務めた荒木さん取材した。



霞ヶ浦湖岸堤

用地保全課の仕事が変わった日

「実は、あの日（東日本大震災）から2日間くらいの記憶はあまりないんです・・・」荒木さんは申し訳なさそうに振り返る。赴任して5ヶ月ほどたったあの日、事務所より約1時間の距離にある「霞ヶ浦用水管理所」で打ち合わせ中に地震に遭遇した。詳細が分からないいま

Profile

利根川下流総合管理所 用地保全課

荒木 段 Dan Araki

平成7年水資源開発公団（現水資源機構）入社。比奈知ダム建設所、大山ダム建設所、思川開発建設所、徳山ダム建設所等、主にダム建設所にて用地業務に従事。平成22年10月より現職。

ま、管理所の手伝いを終え、不安を抱えながらようやく利根川下流総合管理所に戻ったのは当日22時頃になっていたという。事務所内は、大勢の職員が残り、状況の把握や対応に追われていた。

震災前までの用地保全課の仕事は、維持浚渫（湖底に溜まった土砂を浚渫して取り除く）、前浜造成（浚渫土砂を利用し人工の浜を造成することで浚渫土の搬出・処分費を抑え、植物を生育し、景観・環境の改善を図る）等に伴う調整的な業務が主な仕事だった。だが、この瞬間から、災害復旧工事が事務所全職員の最優先業務となった。

まずは、被災箇所の把握をしなければならない。技術職員だけでなく事務職員も、手分けして現地調査へ走った。霞ヶ浦の湖岸堤の延長は全長251キロ、そのうち機構が管理する堤防の延長は約78キロに及び、被災状況の確認には莫大な時間がかかることとなった。

「初日は、6キロ、2日目は10キロ・・・4人ほどのチームに分かれ、湖岸堤の状況などをチェックしながら、ひたすら歩いて被災状況の把握に努めました。」余震の続く中、果てしない湖岸の道を彼らはひたすら歩き続けた。



期内に工事を完了させてくれました。地元関係者のことも考慮していただき、細心の注意を払って工事を行ってくれたと感じています。」さらに、機構の他事務所からも44名の応援職員が派遣されるとともに、全国の事務所から資材やガソリン、食料等の物資が届けられた。地元の方からも、あたたかい声をかけていただいたりした。

「色々な人の温かさを感じ、この2年間、何度となく胸が熱くなりました。通常ではありえない短い工期でこれだけの事業を完了することができたのは、関係市町村、地域住民、施工業者、そして私たち水資源機構が思いをひとつにし、協力しあえたからだと思

思いをひとつに

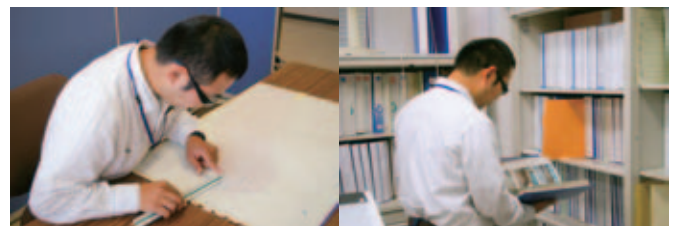
職員の地道な現地確認の末、工事が必要な堤防の沈下・亀裂、堤防護岸の損傷は41箇所(延長約19キロ)と判明。用地担当職員の仕事はここからである。災害復旧工事の発注までに、関係自治会の把握、地権者等からの同意を得る必要があり、工事着手前に用地調査を完了させなければならなかった。用地担当職員と工事担当職員と一緒に、現地の状況や工事の説明などを行い、災害復旧への協力をお願いに走り回った。「片道1時間離れた場所に向かうこともしばしば。私だけでも、100人位の関係者にお伺いしました。」

1件あたり、説明・立会・結果報告と最低3回はお会いしてご説明するという、実に根気のいる任務である。「災害復旧ということもあり、工事計画も図面もそろっていないこともありました。普段の業務であれば考えられないレベルの準備しかできない状況で、初対面の関係者の方々のところに足を運びました。そんな私たちに住民の方は『復興のため』と快く協力してくださいました。関係者の中には、湖岸堤が無かった時代の洪水の怖さを身をもって体験された方もいらして、一刻も早い復旧を望まれる声があり、良い意味でのプレッシャーになりました。」

協力いただいたのは地権者等だけではない。被災箇所に関係する6市町村には、「自治会の把握、情報収集等に大変力を貸していただき、適切な情報提供やアドバイスのお陰で業務を円滑に進めることができました。」災害復旧工事を受注された計14社の業者の方には、「人手不足、資材不足の中、努力して工

います。」

工事に関わった沢山の方へ、感謝の気持ちでいっぱいの子の荒木さん。



「でも、まだ終わっていないんです」

2年を経て、震災関係の工事が完了したとはいえ、通常業務に完全に戻ったわけではないようだ。工事後の関係者への報告や、災害復旧中は我慢して下さっていた「維持浚渫」などの要望への対応、耐震強度を確保するための「液状化対策工事」に伴う対応など課題は多い。従前業務へ完全に戻るにはしばらく時間がかかりそうである。

「これからも、地域の方との連携を大切にし、より一層『理解の得られる霞ヶ浦の管理』を目指していきたいと思います！」湖岸堤から見上げた今日の青空のように、荒木さんの思いは澄んでいる。

当時、90分かけて車で通っていたという荒木さん。当時は、ガソリンが入手できず、家になかなか帰ることができなかったそう。

「ガソリンが無かったので、事務所への泊まりこみが続き、妻と3人の子供たちには、心細い思いをさせてしまいました。その反省もあり、休日は家族サービスに専念する今日この頃です(笑)」

